

抄 録

第31回群馬緩和医療研究会

日 時：平成 27 年 3 月 15 日（日） 13:00~17:30
 会 場：みかぼみらい館 小ホール
 テー マ：がん患者と家族のケアを考える
 当番世話人：石崎 政利（公立藤岡総合病院）
 共 催：群馬緩和医療研究会・塩野義製薬株式会社
 後 援：群馬県病院薬剤師会

〈セッション 1〉

口 演

1. 患者の意思決定を支えるための支援の充実

熊谷有希子, 高橋 明子, 阿部 麗
 金澤かるみ, 尾谷 悠里, 星野 恵子
 堀口 夏海, 中沢まゆみ, 羽鳥裕美子
 近藤 卓（独立行政法人国立病院機構 高崎
 総合医療センター 看護部 緩和
 ケアチームリンクナース会）

【はじめに】 がん治療の高度化・多様化がすすみ、がん看護へのニーズは益々高まっている。がんの診断と治療の過程で、心身の苦痛に対応しながら最善の治療を継続する患者や家族の個別のニーズに対応しなければならない。前研究で重要な面談に臨まれる患者・家族が抱える不安や思いを知ることができ、必要なケアが不十分である現状を痛感した。今回は、前研究を生かし、学習を深めることで患者・家族の意思表示を促すスキルを活用することができたので報告する。【目 的】 患者・家族が医師から病状説明を受けるにあたり、適切な情報提供を行い、コミュニケーションスキルを活用して意思決定支援の充実を図る。【方法】 ①コミュニケーションスキル、患者の意思決定支援についての勉強会。②重要な面談に臨まれた患者・家族へのアセスメントシートを用いた面談による介入。③緩和リンクナースに対して質問用紙での意識調査。【結 果】 月 1 回のリンクナース会を活用して認定看護師を中心に勉強会を行った。ロールプレイを通してコミュニケーションについて学び、NURSE を活用することで、患者の心情理解、不安の表出、患者・家族の精神状態の把握が出来る、患者の感情表出を促進する関わりが持てた。リンクナースに対しての意識調査では、IC 前・中・後のケアについて「できる」と答えた人がほとんどだった。【考 察】 コミュニケーションスキルを学び実践したことで、患者と意識的に

関わる事が出来た。効果的なコミュニケーションスキルを持って患者に共感しようとする事で患者の感情表出を促すことにつながり、それによって患者の真のニーズを明らかにし、意思決定を効果的に進められることが考えられる。また、患者が感情表現できる事で看護師に対して信頼関係を築くことも出来る。今後もコミュニケーションスキルを高め、患者の意思決定を支えるための支援の充実を図って行きたい。

2. その人らしい最期を迎えるための関わり

山口 佑子, 林 多鶴子, 原 真由美
 （独立行政法人国立病院機構 沼田病院）

【はじめに】 終末期がん患者と関わる中で患者が最期までその人らしく過ごせるためには患者の意思決定を支援することが重要であると考え。今回、終末期患者とその家族との関わりを通し学んだことを報告する。【患者紹介】 A 氏：40 歳代 男性。診断名：大腸癌。家族構成：本人、妻、母親、子供 2 人。経過：疼痛コントロール目的で入院。オキファストを持続点滴中。状態安定し本人、家族の希望にて在宅へ一時退院する。希望にて再入院となる。【関わり】 疼痛コントロールが図れ、本人から「家に帰りたい」という言葉があったため、在宅で過ごせるよう関わった。チームで訪問看護ステーションとのカンファレンスを行い、本人、家族が不安なく自宅で過ごせるよう輸液、鎮痛薬の持続注入、レスキューの方法など一つ一つ説明した。しかし数週間すると、また入院したいと希望され、その後も入退院を繰り返した。入院後も不安の訴えが続いており、タッチングや傾聴、マッサージなどを行っていた。【考 察】 出来る限り自宅で過ごすことが出来るよう看護師は関わってきたが、本人は大きな不安を抱えていることが分かった。また妻も仕事を持ち、受験生を抱える母として多忙な日々を送っていた。終末期患者において回復の見込みがないことを知っている患者は、将来を考え、自分がどうしたいのか決めることができず、様々な思いがあり、常に悩んでいると考える。患者にとって自宅で過ごすということは家族へ